

無菌治療部

1. スタッフ

部長(教授)	室井 一男(兼)
病棟医長(講師)	森 政樹(兼)
医員(教授)	小澤 敬也(兼)
	桃井真理子(兼)
(准教授)	永井 正(兼)
	森本 哲(兼)
(講師)	尾崎 勝俊(兼)
	鈴木 隆浩(兼)
	大嶺 謙(兼)
(助教)	松山 智洋(兼)
	柏井 良文(兼)
	佐藤 一也(兼)
病院助教	山本 千鶴(兼)
	翁 家国(兼)
	藤原慎一郎(兼)
	畑野かおる(兼)
	多々良礼音(兼)
シニアレジデント	7名

2. 無菌治療部の特徴

平成16(2004)年9月に本館4階南病棟として開棟し、平成21年9月で5周年を迎えた。当部は、高度な無菌管理が必要な患者であればどの診療科も利用できる中央施設部門であり、血液科、輸血・細胞移植部、小児科の医師から構成されている。クラス100清浄度の病室4床とクラス10,000清浄度の病室4床を有し、長期の骨髄抑制で好中球500/μl未満の持続や免疫不全状態のため易感染状態にある患者を入室適応としている。

3. 実績・クリニカルインディケータ

1) 入院患者数(移植種別)

* 括弧内はミニ移植数

年間総数	27例/24人
血縁骨髄移植	4例
非血縁骨髄移植	12例(1例)
血縁末梢血幹細胞移植	2例(1例)
臍帯血移植	5例(2例)

* うち2例は生着不全に対して実施

自家末梢血幹細胞移植 4例

急性白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫等の難治性血液疾患に対する造血幹細胞移植を中心に、白血病の寛解導入療法や再生不良性貧血の免疫抑制療法目的の患者も受け入れており、今年度は2名の小児患者も入室した。過去5年間(平成21(2009)年12月まで)の造

血幹細胞移植総数は、136例を数える。また、骨髄バンクを介した非血縁者間骨髄移植については、当院で初めての患者から数えて9月で100例目の移植を実施した。平成21年1月から12月の一年間での診療実績では、病床利用率53.1%、病床稼働率54.6%、平均在院日数36.9日であった。全移植数(うち同種移植数)の経時的推移は、平成17(2005)年が18(17)、平成18(2006)年が29(23)、平成19(2007)年が22(16)、平成20(2008)年が35(27)、平成21(2009)年が27(23)と年間同種移植数も平均して20件以上をこなしている。対象疾患の内訳は、

急性骨髄性白血病	10例
急性リンパ性白血病	2例
骨髄異形成症候群	6例
慢性骨髄性白血病	1例
芽球NK細胞性白血病	1例
悪性リンパ腫	4例

である。

2) 治療成績

無病生存が54.2%(13/24)、全生存が66.6%(16/24)であった。死因は再発および原病悪化が3例、感染症が3例、GVHDが1例、生着不全が1例であった。

3) バンクドナー骨髄採取数

当院は、骨髄移植推進財団が指定している非血縁者間骨髄移植認定施設である。本年はバンクドナー骨髄採取を12件、移植コーディネートを55件担当した。

4. 事業計画・来年の目標等

移植・再生医療センター主催の「第2回栃木県の臓器移植医療を考える」に参加した。獨協医科大学、県立がんセンターと協同して1月23日に第4回栃木県移植研究会を開催し、「造血幹細胞移植におけるチーム医療」について討論した。

本年度は、小児科の患者(中学生)2名を受け入れ、当部で骨髄移植を行った。成人と異なり、小児の看護には看護師に多大な負担がかかることが判明した。今後、恒常的に小児科の患者を受け入れるためには、当部に所属する看護師に小児看護の教育を受けて頂くこと、小児科から一時的に看護師の派遣をお願いする等の対策が必要と思われる。

現在、当部専任の医師は存在せず、全員が所属診療科または部門からの兼務である。今後、当部の責任ある診療を行うためには、当部が本務の医師の着任が必要である。